審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　名　鏡　壮太郎

本論文は、十九世紀のフランスにおける建築装飾の産業化過程をあつかったものである。ここでは、当時の建築装飾がどのような素材や技術を用いて製作され普及されていったのか、またそこにおいていかなる芸術家、技術者、製造者、職人といった人々が活躍し、それぞれがどのような役割をはたしていたのかといった点に注目していく。

このようなテーマはこれまでの建築史研究ではそれほどあつかわれてこなかったもののように思われるが、大衆社会が発達した十九世紀のフランスにおいてはとくに芸術と産業の融合は重要なテーマとされており、こうして建築装飾産業の研究からはフランスの十九世紀という時代の特性を明らかにすることができる。

本論は五つの章から構成されるが、これらは大きく二つにわかれており、第一章から第三章までが十九世紀の装飾産業の展開過程をあつかったものであり、第四章と第五章において具体的な建築、ここでは新ルーヴル宮とパリのオペラ座があつかわれている。

まず第一章では、装飾の生産に関わる職能についてみていく。ここではおもに装飾家と産業芸術家について、その職能の展開過程や内容を検討する。

第二章では、十九世紀に新しく開発され、あるいはとくに大きな発展をみせた装飾に関する素材や技術があつかわれる。具体的にはここでは、テラコッタとエナメル、擬石板紙、鋳鉄、ガルヴァノプラスティ、鉛、亜鉛という六つの素材、技術の発展の歴史やその内容を分析する。十九世紀におこなわれた技術革新には、過去の経験的な手仕事を科学の力で再現可能な産業技術として復興するという側面もあった。

第三章では、装飾図集と装飾カタログについての分析をおこなう。装飾図集は十六世紀頃よりみられるが、とくに十九世紀には当時の産業芸術を改善する目的から多く出版された。これら十九世紀の装飾図集の通時的な分析からは、装飾がこの時代を通じて徐々に相対化され分析されて、そして芸術におけるひとつの自律した分野を構成すべく理論化されていく過程をみることができる。一方で十九世紀の装飾カタログの分析からは、当時どのような装飾製品が製作されていたのかを具体的にみることができ、またこれらの製品の特徴を各分野ごとに明らかにすることができる。

第四章と第五章では、第二帝政期におけるもっとも大規模なモニュメントである新ル

ーヴル宮とパリのオペラ座について、とくに技術的、産業的側面に注目しながら検討していく。ここで第二帝政期の建設工事をあつかうのは、この時期フランスの建築装飾産業がとくに重要な展開をしめしたからであり、またとくにモニュメントをあつかうのは、このような大規模な工事には当時多くの芸術家や製造者が参加していたため、そこから建築工事におけるこれらの人々の役割を具体的にみることができる。

新ルーヴル宮とパリのオペラ座にはいくつか対照的な点がみいだせる。例えば前者は増築工事であり、後者は新築工事である。また前者では工事予算にかなりのゆとりがみられたのにたいし、後者ではそれはとくに制限されたものであった。また前者においては当時の雇用促進の目的から非常に多くの芸術家が工事に参加しているが、後者ではその数はある程度抑制されたものであった。新ルーヴル宮は完成後にとくに建物の各部分における不調和がみられるという批評が多かったが、これはこの工事に膨大な数の芸術家が参加したことが一因であったと思われる。

このような新ルーヴル宮の状況は、オペラ座の特徴を際だたせることになる。オペラ座については、ここでおこなわれた設計コンペの批評や提出された計画案の分析から、これらの案がそこに用いられた様式ではなく、機能や外観のモニュメント性といった観点から評価されていたことがわかる。また工事過程における建築家ガルニエの費用削減案の分析からは、ガルニエも同時代の産業芸術の分野においてみられたのと同様、装飾において素材よりも形を重視していたことがうかがえる。さらにそこにおいてガルニエがとくに重視していたのは、この建築における諸要素間の調和であった。ガルニエは例えば彫刻作品については彫刻家たちが遵守すべきシルエットを自ら厳格にさだめるなど、オペラ座の工事においてはつよい指導力を発揮したが、これは諸芸術の統率者としての建築家の役割を充分にはたしてものであり、その結果、オペラ座ではすぐれた調和が実現されることとなった。

以上の十九世紀の装飾産業の研究からは、まず当時の大衆社会においては装飾において素材ではなく形が重視されたこと、また建築装飾産業における既製品装飾は、とくにその選択と構成に建築家の創意がもとめられていたことなどがわかる。そしてそこにおいて本質的な基盤として重要であったのが調和の概念であった。こうしてこれらの分析から、十九世紀の折衷主義は同時代の建築装飾産業と、形、構成、調和といった概念を介して関連させることができる。

以上は興味深い文化史的建築研究であり、博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。